

第 6 回原子力委員会定例会議議事録（案）

- 1 . 日 時 2 0 0 3 年 2 月 2 5 日（火） 1 0 : 3 0 ~ 1 1 : 1 5
- 2 . 場 所 中央合同庁舎第 4 号館 6 階 共用 6 4 3 会議室
- 3 . 出席者 藤家委員長、遠藤委員長代理、木元委員、竹内委員、森嶋委員
 内閣府
 後藤企画官（原子力担当）、犬塚参事官補佐
 経済産業省 原子力安全・保安院
 原子力発電安全審査課 佐藤統括安全審査官、渡邊課長補佐
 核燃料サイクル開発機構
 相澤理事、国際・核物質管理部 田中部長
- 4 . 議 題
 - （ 1 ）九州電力株式会社玄海原子力発電所の原子炉の設置変更（ 1 号、 2 号、 3 号及び 4 号原子炉施設の変更）について（諮問）
 - （ 2 ） J N C 原子力平和利用国際フォーラムの結果について（核燃料サイクル開発機構）
 - （ 3 ）「市民参加懇談会」の開催について
 - （ 4 ）藤家委員長の海外出張について
 - （ 5 ）藤家委員長の海外出張報告について
 - （ 6 ）その他
- 5 . 配布資料
 - 資料 1 - 1 九州電力株式会社玄海原子力発電所の原子炉の設置変更（ 1 号、 2 号、 3 号及び 4 号原子炉施設の変更）について（諮問）
 - 資料 1 - 2 九州電力株式会社玄海原子力発電所原子炉設置変更許可申請（ 1 号、 2 号、 3 号及び 4 号原子炉施設の変更）の概要について
 - 資料 2 第 4 回 J N C 原子力平和利用国際フォーラムの開催結果について
 - 資料 3 「市民参加懇談会 i n 青森」開催計画（案）
 - 資料 4 藤家委員長の海外出張について
 - 資料 5 藤家委員長の海外出張報告について
 - 資料 6 第 5 回原子力委員会定例会議議事録（案）

6 . 審議事項

(1) 九州電力株式会社玄海原子力発電所の原子炉の設置変更 (1 号、 2 号、 3 号及び 4 号原子炉施設の変更) について (諮問)

標記の件について、佐藤統括安全審査官より資料 1 に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(竹内委員) 気体廃棄物処理設備を一部撤去するということだが、これは設備に余裕があるということか。

(佐藤統括安全審査官) 玄海原子力発電所より前に建設された発電所では水素廃ガス処理設備を設置していない。玄海原子力発電所では、1 次冷却材の放射性ガスの濃度が高くなったときに廃ガス処理ができるようにこの設備を導入したが、その後の発電所では、活性炭式ホールドアップ装置など新しい技術が導入されている。このシステムはある一時期だけ導入されたという経緯がある。

(竹内委員) 現在は、静的に廃ガス処理をする装置を採用しているということか。

(佐藤統括安全審査官) そのとおりである。

(竹内委員) 液体廃棄物処理設備については、技術進歩により新しい設備に置き替えるという理解で良いか。

(佐藤統括安全審査官) そのとおりである。従来から新旧 2 種類の蒸発装置を使用してきたが、旧タイプでは直接的に蒸発させており、新しい装置では循環式のものになっている。循環式の性能が非常に良く、旧タイプを撤去することになった。

(竹内委員) 固体廃棄物貯蔵庫についてだが、固体廃棄物はいずれ六ヶ所に持っていくのではないのか。

(佐藤統括安全審査官) そのとおりだが、貯蔵庫の余裕があと 4 ～ 5 年分ぐらいなので、余裕を確保するために増設したいと申請されている。

(竹内委員) 他の発電所と比べて、貯蔵庫の容量が小さいのか。

(佐藤統括安全審査官) 前回は貯蔵容量 2 0 0 リットルドラム缶 1 万本相当を増設し、今回は 2 万本分増設する計画である。今回の増設は、今後の見通しから判断したものだと思う。

(藤家委員長) 運転実績の積重ねにより、合理化した方が良いところや、逆

に追加した方が良いところがいっぱい出てくるものである。ただ、我が国では、「合理化」という言葉はあまり良い意味に取られないところがある。

(木元委員)「設備を合理化」と言うと、「では安全性はどうなっているのか」と疑問に思う方がいると思う。安全性についてもきちんと説明してほしい。

(藤家委員長)そのとおりであり、安全性についての説明は難しいところがあるが、重要なことである。一方で、このような運転実績の積重ねによる合理化は進めていかなければならない。

(佐藤統括安全審査官)今回の変更は、余裕があるところを削除するものであり、これは運転保守の面からも安全性の面からも良いことである。また、1号炉と2号炉で設備を共用化することで安全性が損なわれるということはない。

(2) JNC 原子力平和利用国際フォーラムの結果について(核燃料サイクル開発機構)

2月13日(木)～14日(金)に開催された「JNC 原子力平和利用国際フォーラム」の結果について、相澤理事より資料2に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(遠藤委員長代理)私も本フォーラムに出席した。本フォーラムにはIAEA(国際原子力機関)保障措置担当のゴールドシュミット次長も出席されていたので、2時間ほど会談を行った。私が以前ウィーンに出張したときに、日本の保障措置に関し10ぐらいの指摘があったが、1つずつ回答し、9割以上納得いただいたと思う。我が国は、核不拡散に関し国際的に協力することももちろん重要なことだが、まず自国について疑念を持たれないようにすることが大前提であり、常に自省していくことが重要だと思う。

(竹内委員)私は2日目に参加した。米国エネルギー省のマーカス首席次長の講演を聴いたが、水素製造やAdvanced Fuel Cycle(先進燃料サイクル)についての講演が印象的であった。また、仏国原子力庁のブシャール局長からは、フェニックスを停止した後は「もんじゅ」が世界のナトリウム冷却炉開発を背負ってほしい、という強いメッセージがあった。日本としては、きちんと考えていかなければならないことだと思う。

(藤家委員長) やはり世界は核燃料サイクルを中心に将来を考えようとしていると思う。米国においても、クリントン政権下で N E R I (原子力エネルギー研究イニシアチブ) が始まり、今の G E N - (第 4 世代原子力システム) や A F C I (先進燃料サイクルイニシアチブ) につながっている。そのような中で我が国はどのように対応していくべきなのか。私は、最初は米国が先頭で、次に仏国、その次が日本という意味で、「日本は第 3 の先頭」と言ってきた。日本の関係者は、世界の新しい動きに注意しなければならないと思う。A F C I では、2030 年頃にウランの供給が困難になる、ということを前提としており、この点も重要なことである。

(木元委員) 参加者数は約 320 名ということだが、これは予想どおりの結果なのか。

(相澤理事) ほぼ予想どおりの参加者数だった。

(木元委員) どのような方がどのくらい参加されたのか。本フォーラムはメッセージ性の強いものだったと思うが、原子力関係者以外の方がこのテーマにどれだけ関心を持っていたのかについて知りたい。関係者だけでやっているのではないか、というイメージを持たれてしまうのは良くないことである。

(相澤理事) 日本原子力学会や J N C (核燃料サイクル開発機構) の H P に広告を出し、どなたでも参加いただけることを事前に案内した。

(木元委員) 学会や J N C の H P では、内輪の中という感じがする。一般誌などに広告を出したりはしなかったのか。記事にしてもらうという方法もある。民間でもいろいろなシンポジウムを開催しているので、それとリンクさせるということも考えられる。いろいろと工夫していく必要があると思う。

(相澤理事) 木元委員のおっしゃるとおり、次回はもっとたくさんの方に参加していただけるように検討したい。

(3) 「市民参加懇談会」の開催について

3 月 15 日 (土) に開催予定の「市民参加懇談会 i n 青森」の開催計画について、犬塚補佐より資料 3 に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

(木元委員) 「市民参加懇談会 i n 青森」の前、2 月 28 日 (金) に「第 8

回市民参加懇談会コアメンバー会議」を開催するが、そこでもう少し検討しなければならないことを議論する予定である。市民参加懇談会では、市民に密着した形で、一般の方々の疑問やお考えを伺ったり交流したりすることが大前提であり、広聴を基盤に足場を作っていくと展開していかないと思う。今回のテーマは、『「知りたい情報は届いていますか」 - 核燃料サイクルを考える - 』であり、日本原燃の再処理事業所の貯蔵プール水漏えいなどについても取り上げられることになると思う。第２部では、「市民参加懇談会 in 東京」と同じように参加して下さった方々から御質問・御意見をいただき、それを機にパネリストたちと議論するという形にする予定である。パネリスト以外に、日本原燃や資源エネルギー庁、原子力安全・保安院の方々にも後ろに控えていただき、会場から現在の状況など、もう少し詳しいことを聴きたいという声があったときに説明してもらえるようにしておく予定である。パネリストとのやり取りだけではなく、なるべく幅広く、知りたい情報は入手していくという姿勢を貫くつもりである。

また、第１部の前に、私から日本の原子力（核燃料サイクル等）を巡る状況について報告する予定である。そこでは、なぜ日本は核燃料サイクルを進めようとしているのか、いつ頃から立ち上げて、どのような体制の下で現在に至っているのか、ということについて時系列的に簡単に説明するつもりである。その上で、エネルギー自給率の低い日本は今後どうするのか、そのとき知りたい情報はどうなっているのか、というようなことについて御意見を伺いたいと思う。

（４）藤家委員長の海外出張について

標記の件について、後藤企画官より資料４に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

（藤家委員長）ドイツでは、原子力についていろいろと議論されているところだが、今回は放射性物質の分離・消滅や原子力防災、高レベル放射性廃棄物の処分などについて国際的な議論をしたいということで、私に出席の要請があった。これまで、我が国でも何か起きるたびにドイツからいろいろな方をお呼びしてきた。例えば、ドイツの原子炉安全委員会ケスラー委員長には原子力委員会定例会議に御出席いただいたことがあった。

ウィーンのＩＡＥＡでは、核燃料サイクル政策などについて意見交換を行う予定である。

(5) 藤家委員長の海外出張報告について

標記の件について、犬塚補佐より資料 5 に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

(藤家委員長) 所感を申し上げますと、ベトナムは原子力に関して非常に関心が強く、いろいろなことを考えていると感じられた。日本・韓国・ロシア・フランスがいろいろとアプローチし、説明をしている。原子力発電導入に向けた全体像をどうするのが重要であり、我が国が協力する際、民間だけでは限界があると思う。これに対し、国としてアジア協力という観点から全体をどのように見るのが重要ということを強く感じた。遠藤委員長代理を始めいろいろな方と相談して、今後どのように対応していくのか考えていかなければならない。

ハノイ国立大学での講演・質疑応答は、かなり活気のあるものだった。高橋主査にも 20 分ほど日本の原子力政策について講演してもらったが、高橋主査は学生に近い年齢なので、学生もかなり喜んでいて、学生は、私たちも同じようにやれるのではないかと、思ったのではないだろうか。なかなか質疑が終わらなかった。早速次の日に、教育訓練副大臣に「鉄は熱いうちに打ったほうが良いと思う」とコメントした。我が国の原子力が始まった頃と同じようなムードを感じられた。

ベトナムには科学技術省と工業省があり、一方で原子力の科学技術を見て、他方で原子力発電を見るということで、まさに我が国の旧科学技術庁と旧通商産業省との関係に似ているところがある。各大臣との会談では、両省がきちんと連携していく必要がある旨申し上げた。

教育訓練副大臣には、教育や人材育成の重要性について申し上げた。科学技術大臣と教育訓練大臣はハノイ工科大学の学長経験者であり、技術者が政治の要職にいるということが印象的であった。

(6) その他

- ・事務局作成の資料 6 の第 5 回原子力委員会定例会議議事録（案）が了承された。
- ・事務局より、次回定例会議の議題は、2 月 18 日～19 日にサンクトペテルスブルグで開催された I T E R 政府間協議の結果についてなどを中心に調整中である旨、発言があった。